

12月の気候は変わりやすく、暑くなったり寒くなったり。会社の中でも何人か大きなマスクをした人たちを見かけるようになります。そんなとき、わたしは彼らの回復を願うとともに自分にも注意するよう言い聞かせます。



しかしある日の午後、わたしは急に寒気を感じました。震えて、まるで風に吹かれる木の葉のようです。同僚の羽毛ジャケットを借りたら少しよくなりました。ほかの同僚は状況を聞いてくれたり薬をくれたり、気を使ってくれました。仕事が終わると、わたしは薬を飲んですぐ布団に潜り込みました。頭はふらふらですぐに眠りに入りました。どのぐらい眠ったでしょうか。うとうとする中でだれかがわたしの名前を呼んだような気がしました。そしてドアをノックする音。「どう、大丈夫？」。夢かと思いましたが、どうやらそうではないようです。ドアが開き、ひとりの同僚が入ってきました。笑顔を浮かべて手には湯気の立つしょうがスープ。わたしには彼女が天使に見えました。そのあと彼女は親切にわたしの体の具合を尋ね、わたしがスープを飲み終ると帰っていききました。このときわたしは心にくもりを感じました。

人は体の具合が悪いとき、心が弱くなります。そんなときにももらったしょうがスープは何よりも温かかったです。

上海合璧生管課副課長 何曉敏

入社以後月日は流れ、何もわからなかった少女がいまは立派な合璧人になりました。この数年で、わたしの心にもっとも強く残っているのが2002年10月、まだこの会社に入って間もないころに起きた父と祖父の交通事故の際の一連の出来事です。父と祖父は杭州に向かう途中で交通事故に遭いました。けがはひどくすぐに病院に運ばれました。このときわたしの家には病院に払う多額の医療費がありませんでした。それを知った林経理はこのことをすぐに董事長に伝えてくれました。董事長は林経理に数万元のお金を持たせて杭州の病院まで走らせた。これによって父と祖父は一命を取り留めることができました。わたしの家族はみんな大変感激しました。とともに、わたしはこの恩は仕事で頑張らざるを得ないと思っただけです。



2010年の会社の方針は「智恵、醒悟、行動（智恵と悟りで行動する）、同心、同歩、同調（心を一にしてともに歩む）、関心、關懷、關照（気配りと思いやりをもって接する）、挑戦、創新、再生（挑戦、創造、再生）、創造価値、共生共榮（価値の創造、共存共榮）」ですが、わたしがこの中でもっとも印象に残ったのは「関心、關懷、關照」です。台湾本社のベテラン社員が上海まで電話して新人を思いやったり、上海の幹部に頼んで会食を計画したり、董事長の息子さんのおさん、王さんが毎日従業員と直接会話したり、これらは過去になかったことです。わたしの部署でも管理方式が変わりました。これまでは厳しく理論でもって管理していたのがやさしく教えるような管理になったのです。これによって仕事を教えるとき、決して大声を上げることはなくなりました。また、董事長のおさんが体の弱い社員に対してどうすれば健康を維持できるか教えたり、これらはすべて「関心、關懷、關照」で、このことから董事長がいつも従業員のことを気に掛け、まるで家族のように思っていることが伺えます。

上海合璧製造課班長 黃靜靜

我が心の董事長

わたしは合璧を愛しています。それは花園のようにきれいな工場があるだけでなく、世界を代表する端子台のメーカーであり、5S活動を徹底して行い、共存共榮の理念を持ち、そして何よりも素晴らしい董事長がいるからです。合璧のことをよく知らない人はきっと合璧もほかの会社と同じように普通の会社だと思ってしまうかもしれません。しかし、わたしの話を聞いたあとで、董事長の素晴らしいことに尊敬の念を抱き、合璧グループの一員であることに誇りを感じてほしい。



1970年代の台湾は能力のある者が頭角を現す時代でした。我々の董事長は特に有利な背景があったわけでもなく、天から降ってきたような幸運に恵まれたわけでもありませんでした。しかし、若いころの彼は大きな志を持っていました。明晰な頭脳と時流を認む能力を武器に起業家としての道を歩きました。最初は熱硬化成形の加工品からはじめて徐々にOEM、ODM、OBMへと転換していきました。製品はエレベーター、重電、PLC、UPSなど新しい分野に参入し、端子台では世界一位の地位を築きました。会社をこのまま大きくしたのは、董事長の血と汗の結晶です。しかし、ここで忘れてはならないのは、董事長は決して投機的なやり方で会社を発展させたのではないということです。常に一歩一歩着実に顧客からの信頼を勝ち取って続けた結果が今の会社につながったのです。こうしてわたしたちの董事長はわたしたちを率いて前進を続けてきました。

すべての成功者が董事長のように苦難の道を経て成功をつかんだわけではありません。それに謙虚な気持ちを持っているわけでもなく、儉約した生活を送っているわけでもありません。董事長は毎朝4時に起きてジョギングをします。彼の走りは事業と同じでゆっくり休むことなく前に向かって走ります。そして普段はだれとでも気軽にふれあいます。上海に来れば、みんないっしょに食事をし、わたしたちの仕事や生活に気を配ってくれます。また、董事長は日本語、英語、スペイン語などを熱心に勉強し、音楽にも精通しています。わたしたちは彼といっしょに「合璧版歌」、「茉莉花」、「甜蜜的家庭」などの歌を歌って幸せを実感します。

董事長はよくわたしたちにこういいます。「利益の創造は企業の経営過程。感謝に報いて社会還元することが最終目標であり、人生の意義でもある」。彼は二千五百年前の世界の三つの文明でもってわたしたちに善行を進めるとともに正しい価値観と人生観を教えてくださいました。中国文明：黄河の畔で思考する孔子の説いた人と人の間の信頼の重要性、感謝に報いて社会還元すること。ギリシア文明：エーゲ海で思考するアリストテレスの説いた人と自然の間の真善美。インド文明：ガンジス川の畔で思考する釈迦の説いた人と神の合一、禪の思想。こうした企業文化を根付かせるため、会社は毎年利益の5%を社会還元したり、25%を従業員に還元したり、全従業員を慈善活動会に加入させて一日一善を実践したりしています。董事長は善の循環を信じています。少しづつの努力が根付いて経営理念となり、企業文化を作り、やがては水続経営の基礎となります。また、それによってわたしたちの心も浄化されていきます。

わたしたちの董事長は強く思いやりのある企業家です。「先人が木を植え、後の人がその木陰に涼む」といいますが、今日わたしたちが享受している多くは董事長という大きな木の下にあります。同僚のみならず、わたしたちは董事長のことを誇りに思わない理由があるでしょうか。董事長の下で頑張らしましょう。わたしは本当に董事長のことを素晴らしいと思っています。これは永遠に変わらないでしょう。

董事長、あなたがくれた物や環境、そして価値観や人生観に対して心から「有難う」といわせてもらいます。そしてきっとあなたの期待に副えるよう次の40年に向かって頑張りたいと思います。「わたしは合璧を愛しています。そして合璧もわたしを守ってくれます。わたしは温かい家庭の中にいます」。これはいつまでも変わらぬわたしの思いです。

上海合璧設計課高級エンジニア 施冉



2010/07 3期 07月10日發行 出版社：合璧文化基金會 發行人：詹其力 編輯指導：陳慶煜、詹杰文 總編：王迎春、林生富 編輯委員：吳桂喜、李高燕、劉仙 印刷：上海綜禾印刷有限公司

陳定國博士の合璧講演 企業管理の分野で世界有数の中国人博士 兩岸産官学と一般民間人の仕事における第一人者



董事長(右)、陳博士(中)、張氏(左)が記念撮影

合璧は創立40周年を迎えましたが、これに当たっての派手な記念イベントや大型宴会、歌手を招いてのにぎやかなコンサートなどは一切行いませんでした。その代わりに、「これまでの40年を振り返って、感謝に報いて次の40年へ」をテーマにいくつかの意義あるイベントを企画しました。これらを通じて会社の価値観をもう一度明確化するとともに、これをこれまでの40年から今後40年に向かうひとつの区切りしようと考えたのです。こうやって企画したイベントは国内外の見学、基金会の設立、知識人の招聘による指導などです。その中のひとつが2010年6月10日、陳定國博士を招いて行った講演会です。陳博士は世界でも有数の企業管理を専門とする中国人の博士で、兩岸産官学（中国と台湾における教育機関と政府の連携による研究開発や事業）や蒼生工作（一般民間人の仕事）研究の第一人者として、企業の「有効経営」や「知恵、善行、達成」を重視した経営、一般民間人の仕事などについて研究しています。これまで中国や台湾の多くの企業からの講演依頼を断ってきましたが、今回合璧40周年の招聘に応じてくれました。大企業の好待遇でも招聘できなかった陳博士の講演をなぜ合璧ができたかについては「会社の経営理念と企業文化、そして董事長の人生哲学によるところが大きい」と陳博士は答えています。陳博士は董事長に宛てた年賀状の中でこういっています。「董事長についての資料を読ませていただきました。董事長の理念と業績は賞賛に値します。また、董事長の読書、運動、睡眠などの習慣は本当に素晴らしい、広く進める価値のあるものです。董事長は間違いなく台湾の光であり、知恵と善行と達成を実践できる人物だと思えます」。

合璧は陳博士の講演という、たいへん貴重な機会を独り占めするつもりはありませんでした。陳博士の唱える有効経営理念をともに学ぼうと、講演会には仕入れ業者や顧客も招待しました。これも合璧が日頃から重視する「感謝に報いて社会還元する」の延長だと思えます。

さて、ここで陳博士の講演の中から一般民間人の仕事について、感じるどころがあったので簡単に紹介したいと思います。陳博士はわたしたちの工場内にある「静思の小路」に立てた石碑「智恵、成就（知恵、善行、達成）」について話しました。石碑の6つの文字は簡単ですが、身につけるまでには一生かかるかもしれないといいました。知恵については董事長もよく話しています。「知恵とは人、事、物を通して、体験して考えた結果生まれる高い次元のものです。それは学習したり推理したり得られるものではなく、唯一体験すること得られるものなのです」。わたしには董事長のように豊富な経験はありませんが、それでも、この何千年にもわたって崇拝されてきた知恵ということばからは宇宙に存在する万物を包み込む大きな力、人類の物質、精神文明を発展させる大きな力を感ずります。



石碑完成儀式のあとで記念撮影する従業員一同

陳博士は「役職と給料は有限だが、知識と知恵は無敵だ」ともいっています。この考えは董事長のいう「給料+α」に似ていると思います。また、「人は一生で次の3つができれば成功者になれる」ともいっています。その3つとは「慈善、儉約、一番にならない」だといっています。これを聞いたとき、わたしは3つ目の「一番にならない」の意味がよくわかりませんでした。子供のころから親や先生が一番を目指せと教えられてきたのに、どうして一番になることはいけないのだろうかと思いました。陳博士の説明では「人は徳や成績、名誉をほかの人に譲れば、ほかの人から認められる。そうすることでさらに多くの徳や成績、名誉を得られる」というのです。たしかにわたしたちは何かを必死に追い求めているとき、それはなかなか手に入りません。しかし、それを止めたとき、ごく自然にそれが手に入ることがあります。やはり成功者が悟った話の中にはお金で買えない貴重な内容が含まれていると思えました。まずは耳を傾けることが大事です。特に若い人は年長者の話を耳を傾けなければならないと思います。もちろん、そのときは心を開くこととや木当の意味を理解できないこともあるでしょう。しかし、こうしたケースでもあるとき突然理解できる日が来るのです。董事長の話が、ある日突然わかることがあるように。「慈善」と「儉約」については、董事長自身がもっともよい例です。今さらわたしが説明する必要もないでしょう。そしてもうひとつ、陳博士が来る前に董事長は事前準備に対する要求と確認が大切だということも教えてくださいました。これについては詳しく説明しませんが、今回学んだことのひとつでした。

最後にわたしたちは先人の作った木陰の下で涼むように、今自分たちは素晴らしい環境にいることを実感しました。そして今後も合璧の木陰を広げていかなければならないと思えました。

上海合璧總務課同仁 李高燕